

人文学部プロジェクト活動

人文学部は、以下のプロジェクトに戦略的経費（研究プロジェクト助成）を配分しています（右は代表者名）。

刊行物助成

英語と英米文学	外山 健二
独仏文学	下寄 正利
山口地域社会研究	速水 聖子
山口大学哲学研究会	栗原 剛

『英語と英米文学』

『英語と英米文学』は、山口大学人文学部・教育学部・経済学部・国際総合科学部・教育支援センターに所属する教員グループが、年1回刊行している学術研究誌である。メンバーは現在14名で、このうち人文学部教員は欧米言語文学コース所属の6名（岩部浩三、太田聡、上田由紀子、池園宏、外山健二、カテリーナ オリハ）である。掲載内容は各メンバーの日頃の研究成果を反映した論文等で、その領域は英語学・英米文学・英語教育・英語圏文化など多岐に及んでいる。1965年に創刊された本誌は半世紀以上に及ぶ歴史があり、今年度で第57号の刊行を迎えた。最新号の掲載内容は以下の通りである。

1. 総称と同定—ヘブル語代名詞的コピュラと日本語同定文
(Generics and Identification: Pronominal Copulas in Hebrew and Identificational Sentences in Japanese)
(岩部浩三：人文学部)
2. 水の中の夢—『指輪物語』における「生と死」のテーマについて
(Dreaming in the Water: The Theme of “Life and

Death” in *The Lord of the Rings*)

(渡邊裕子：教育支援センター)

3. Japanese Alice: A Quest for Meaning in Osaki Midori’s “Wandering in the Realm of Seventh Sense”

(Olha KATERYNA：人文学部)

なお、人文学部から配分された戦略的経費（研究プロジェクト助成）は、今年度の刊行・発送に要する費用の一部として有効に活用されている。また、本誌の電子版は山口大学学術機関リポジトリYUNOCAにより学内外に広く公表されている。これらの支援を受け、『英語と英米文学』は今後も継続的に各研究者の活動成果の公表に寄与していく予定である。

(外山健二)

『独仏文学』第44号

山口大学独仏文学研究会が刊行している『独仏文学』は、ドイツ語文化圏およびフランス語文化圏の文学や言語学をはじめ、文化、歴史、社会、美術など幅広い分野の研究論文を掲載する学術雑誌である。当雑誌では、投稿論文の質を確保するため、2018年の総会の決定に基づき査読制度が導入されている。今年度編集委員会は学外の研究者4名に審査を依頼した。第44号に掲載されるのは次の4本である。

1. Franz Hintereder-Emde: *Kulturhistorische Aspekte von Johanna Spyris Heidi*
2. Michel de Boissieu: Ôoka Shôhei et *La Belle et la Bête* de Jean Cocteau : une critique lacunaire
3. Masashi TAKEMOTO: Sur quelques caractéristiques des langues romanes en tant que langues à cadrage verbal
4. 下嵯正利: 「ゲルマン語強変化動詞第2種の歴史の変遷 (2)」

(下嵯正利)

「山口地域社会研究」プロジェクト報告

「山口地域社会研究」プロジェクトは山口地域社会学会の研究活動を中心としており、現在に至るまで、例年2回の研究例会の開催、ならびに年1回の学会誌『やまぐち地域社会研究』の発行を継続して行っている。研究例会は、会員によるそれぞれの研究発表を毎回2~3本ずつ報告する形で行われ、活発な意見交換がなされている。人文学部の現会員は横田尚俊・速水聖子（現代社会学）、高橋征仁・桑畑洋一郎（社会心理学）、谷部真吾・小林宏至・山口睦（民俗学・文化人類学）の計7名で、社会学コースの教員全員が会員である。この他、大学院人文科学研究科（修士課程）と大学院東アジア研究科（博士課程）の学生会員もおり、例会は大学

院生の研究成果発表として大きな役割を担っている。

2022年は、新型コロナウイルスの影響も多少緩和される中で、例年通り7月と11月の年2回の研究例会を対面で開催することができた。

第52回研究例会は7/30（土）に開かれ、「子どもの存在をめぐるコミュニティ形成の可能性」（山口大学 速水聖子）、「香典返しを寄付することは可能か—贈答規範からの逸脱と転換—」（山口大学 山口睦）、「地方においてスポットを探す／作る」（山口大学 桑畑洋一郎）の3本の報告がなされた。

第53回研究例会は11/19（土）に開かれ、「身体障害者支援活動におけるケアとしてのボランティア—山口市『書道講座』と湯陰県『義診活動』を中心に—」（山口大学大学院人文科学研究科 張聡）、「日本の医療観光業をめぐる現状調査」（山口大学大学院人文科学研究科 于潼）の2つの報告がなされた。

両例会ともフロアも交えて活発にディスカッションが行われた。今年度の研究例会の成果を踏まえて、年度末に学術雑誌『やまぐち地域社会研究』（第20号）を刊行する予定であり、現在、編集作業を準備しているところである。

(速水聖子)

『山口大学哲学研究』

山口大学哲学研究会は、山口大学に所属する哲学・思想系の教員を中心とする組織で、会誌の刊行、合評会、研究発表会などの活動を行っている。

現在、正会員（学内の常勤教員である会員）は11名で、そのうち、人文学部の教員は、ジュマリ・アラム、柏木寧子、栗原剛、藤川哲、村上龍、横田蔵人、脇條靖弘の7名である。他学部の正会員は、田中智輝（教育学部）、山本勝也（経済学部）、小川仁志（国際総合科学部）、小山虎（時間学研究所）の4名である。また、名誉会員（過去に常勤教員として山口大学に所属したことのある、おもに学外の会員）は22名で、そのうち、人文学部の元教員は、上野修、遠藤徹、加藤和哉、木村武史、周藤多紀、武宮諦、田中均、外山紀久子、林文孝、古莊真敬、頼住光子の11名である。2022年度は、栗原剛（人文学部）、脇條靖弘（同）の2名が運営委員を担当した。

本年度は、まず2022年3月（昨年度）刊行の会誌『山口大学哲学研究』第29巻を、年度をまたいで2022年度に入ってから、会員諸氏および諸機関宛てに発送した。掲載論文等は、「かくも大きく立派な地位を感性にさずける心理学」(4) —晩期ベルクソン哲学における「感性」概念（村上龍）、「反出生主義をめぐる今日的状況と思想的課題」(田中智輝・村松灯・樋口大夢)、研究ノート「香月泰男『画家のことば』索引(1)」(藤川哲)、『『葉隠』における覚悟と実践』(栗原剛)の4本である。なお、刊行に際しては、人文学部より支給された「刊行物助成経費」を、印刷・製本費用の一部に充てさせて頂いた。

また、2022年9月20日、「2022（令和4）年度山口大学哲学研究会」を開催し（於人文学部大講義室）、本年度から名誉会員となられた佐野之人氏（山口大学教育学部特命教授）による講演「授業「有、無、成とは？」」および、会誌第29巻所収の研究論文、田中智輝・村松灯・樋

口大夢「反出生主義をめぐる今日的状況と思想的課題」に対する合評会（コメンテーター：藤川哲氏（本会正会員））を、あわせて実施した。

下半期にあつては、会誌第30巻の編集・刊行作業を行った。当該最新巻は2023年3月刊行の見込みであり、周藤多紀、柏木寧子、脇條靖弘、村上龍、藤川哲（掲載予定順）の各氏による、研究論文等の掲載が予定されている。

（栗原 剛）